

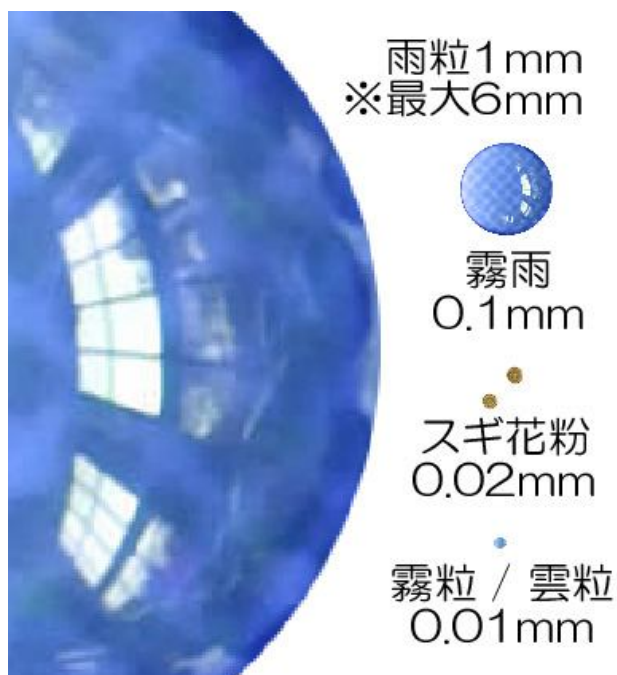
「東京の霧(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

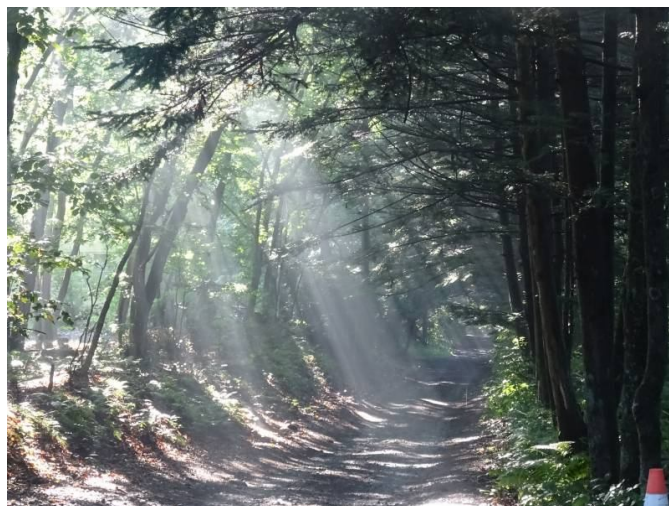
田中 千尋 Chihiro Tanaka

霧と雨は似ているようで全くちがう。「大気中に浮いている天然の水滴」という点では、共通している。一番ちがうのは、その水滴の大きさである。



上図は、平均的な雨粒、霧雨の粒、雲粒(霧粒)の大きさの比較模式図である。(作図; C.Tanaka) 雨粒は霧粒と比較して、直径で100倍、体積・重さでは100万倍近くもある。雨粒の降下速度は1秒で1m以上になるので、「降雨」として観測される。しかし、雲粒(霧粒)の降下速度は、1秒で1cm程度と、非常に遅い。仮に、屋外でも完全に無風なら、「霧も降ってくる」可能性はある。実際は完全無風などあり得ないので、霧はいつまでも浮いていられるのだ。風媒花のスギ花粉も、およそ同じ程度の降下速度なので、非常に遠くまで飛ぶことができる。

実は霧と雲は実体としては、全く同じものである。従って「霧=雲」「霧粒=雲粒」ということになる。簡単に言えば、遠く(外部)から見ると「雲」、近く(内部)から見ると「霧」となる。これは、特に登山をしていると実感できる。山麓から見た山頂部が雲に隠れているような時、そのまま山を登り続けると、山頂では霧の中ということになる。「山の天気は変わりやすい」というのは、こういうことである。



昼と夜の寒暖差が大きい夏の高原では、朝に霧が発生することが多い。そこに木々の隙間などから朝日が当たると、美しい光芒が現れる。これは「天使のはしご」と呼ばれる。こうした晴れた日の霧は、地面に降下する前に、太陽光で蒸発してしまうことが多い。



「川霧」もよく見られる現象だ。川面の近くと上空に気温差がある時(多くは川面のほうが低い)に発生する。



先日の朝、都内が濃霧に覆われた。これは珍しいことである。私は霧が好きなので、何枚も写真を撮った。